

<学界動向>

1241年4月9日 歴史的決戦の実像 ～ワールシュタットの戦い～

千葉 敏之

Schmielewski, Ulrich(Hg.), *Wahlstatt 1241. Beiträge zur Mongolenschlacht bei Liegnitz und zu ihren Nachwirkungen*. Bergstadtverlag Wilhelm Gottlieb Korn, Würzburg 1991.

本書はドイツ系・ポーランド系双方の研究者による11論文からなる論文集で、その内容は以下の通りである。

ウルリヒ・シュミレフスキ(Ulrich Schmielewski)

「ワールシュタット戦前後の13世紀シレジアにおける領域的拡張とラント開発(Landesausbau)」

ハンスゲルト・ゲッケンヤン(Hansgerd Göckenjan)

「モンゴル側から見た西征(1236-1242)」

フェリキタス・シュミーダー(Felicitas Schmieder)

「ポーランド、シレジアへのモンゴル襲来～その驚嘆の報告、援助要請、および西欧の対応～」

リヒャルト・フォン・ドナート(Richard von Donat)

「ワールシュタットの戦いの軍事史的考察」

ヴィンフリート・イルガンク(Winfried Irgang)

「ヤン・ドゥウゴシュの叙述におけるワールシュタットの戦い」

トマシュ・ヤシンスキ(Tomasz Jasiński)

「ドイツ騎士修道会のワールシュタットの戦い参戦問題」

マティアス・ヴェーバー(Matthias Weber)

「ワールシュタットの戦いとその評価の歴史的変遷」

ヴェルナー・バイン(Werner Bein)

「祖国の一大事件～ドイツ文学におけるワールシュタットの戦い～」

ヴェラ・シュミレフスキ(Vera Schmielewski)

「中世の絵画資料におけるワールシュタットの戦い」

ハインリヒ・グリュエーガー(Heinrich Grüger)

「在ワールシュタット・ベネディクト会系司教座聖堂参事会」

ベルンハルト・ルブレヒト(Bernhard Rupprecht)

「ワールシュタットのベネディクト会系教会～芸術作品と記念碑的絵画群～」

この他にワールシュタットの戦いに参加したと言われる貴族家門の歴史に関する簡略な概観、参考文献目録、ポーランド語によるレジュメ、が巻末に付されている。

本稿では上書をベースに、1241年ワールシュタットの戦いについての現時点における最新の成果を概観することを目的とする。その際、《史実》をめぐる問題、モンゴルサイドからの位

置づけ、軍事的観点、ドイツ騎士修道会の参戦問題、《伝説》をめぐる問題、といった諸観点を基軸に据えて見ていくことにする。

史実をめぐる問題

1241年4月9日の事件の具体的経過を検証する際われわれが手掛かりとすることができる史料は限られている。まず同時代証言としては、皇帝フリードリヒ2世のイングランド王ヘンリー3世宛書簡やオーストリア公フリードリヒの皇帝コンラート4世宛書簡等の書簡類¹、在ケルン聖パンタレイオン修道院の年代記、トロップハウの聖マルティヌスの年代記等の年代記類、その他教皇使節の報告などがある²。これらの史料群は1241年の事件の同時代における西欧世界への影響を推し量る上では有益なものであるが、いずれも断片的で、直接的情報源からはかけ離れている。

今日われわれが「事実」として把握しているワールシュタットの戦いの経過は、主として15世紀クラクフの司教座聖堂参事会員ヤン・ドゥウゴシュ (Jan Długosz/ Iohannes Longini, 1415-1480)の年代記の叙述に依拠したものである³。しかし彼の叙述には数多くの誤謬・矛盾・反復が含まれており、その信憑性にはすでに19世紀以来疑念が呈されている。イルガンクによれば、ドゥウゴシュは証書類、公文書類、年代記類、聖人伝、過去帳、口頭証言など多種多様な史料に基づいて叙述をおこなっているが、原典への言及は数少なく、史料批判も不十分である。また原史料の記載事項を恣意的に組み替えたり、ある人物を全く別の文脈で登場させたりもしている。ドゥウゴシュが主に原典として依拠したと考えられる史料は、13・14世紀成立の『ヴェルコボルスカ年代記』、1300年以降成立の『聖ヘートヴィク伝』などであると考えられるが、いずれの史料にも戦闘の詳細な経過についての記述はない。したがってドゥウゴシュは同年代記執筆当時巷に流布していた伝承と今日失われている何らかの史料をベースとして記事を書いたのではないかと考えられる。ただしドゥウゴシュの叙述から原典部分を識別するのはきわめて困難であるため、ポーランドの中世史家ラブダの唱える説、すなわちドゥウゴシュが今日遺失している13世紀中葉のドミニコ会士の手になる年代記を底本としている、とする説も、数ある仮説のうちのひとつにすぎず、有力な裏付けはない、という。

ここでやや長くなるが、基本的情報の確認のために、ヤン・ドゥウゴシュの叙述の概要をイルガンクにしたがって紹介しておく(109～111頁)。

「1241年3月31日にクラクフを荒廃させ、焼き払ったタタール人たちは、さらにヴラティスラヴィア [プレスラウ/ヴロツワフ] へと向かった。オポーレ公ミェシュコはオーデル渡河の際にラチブシュにおいて敵の一隊に抗戦することもできたが、敵軍の総戦力の多さに恐れをなして、親戚であり、対タタールの軍勢を集結しつつあったヴラティスラヴィア公ヘンリクがいるレグニツァに向かった。ヴラティスラヴィアの市民たちは恐怖心から街を捨て、城の守備兵がすべての家財・食糧を持ち出したあと火を放った。タタール人たちはドミニコ会士や多くのキリスト教信者が逃げ込んだヴラティスラヴィア城の攻囲をわずか数日で、ドミニコ会修道院院長ケスラウス (Ceslaus)の頭上に燃え盛る柱が現れたとき、取りやめた。タタール人がレグニツァの

方向に街々を焼き払いながら進軍しているとき、公ヘンリクはヴェルコポルスカおよびシレジア、農村の騎士および武装した者を呼び集めた。一連の義勇兵、十字軍もこれに加わり、その中にはオポーレ公ミェシュコ、その従兄弟で、モラヴィア辺境伯ディポルトの息子ボレスワフ、プロイセンのドイツ騎士修道会総長 (Hochmeister) ポツポ・フォン・オステルナらとその騎士たちも含まれていた。レグニツァ城を出るとき、聖母マリア教会の屋根から石が落ち公の頭をかすめた。これは皆にとって不吉な予兆であった。

4月9日、ナイセ／ニサ川に囲まれた「善き平原 (Bonus Campus [これは明らかにドイツ語 Wolstat の誤訳])」に軍勢は布陣した。ボレスラウス率いる第一部隊は義勇兵、十字軍兵士、およびゴルトベルクの鉦夫から成っていた。数日前にフミェルニクにおいて戦死したクラクフの Palatinus Wladimir の兄弟の Sulislaus の指揮する第2部隊はクラクフおよびヴェルコポルスカの騎士から成り、第三部隊はミェシュコ指揮下のオポーレ騎士によって構成されていた。第四部隊はポツポ率いるドイツ騎士修道会軍であり、シレジアおよびヴラティスラヴィアの武装兵士、さらにはヴェルコポルスカ、シレジアの精鋭によって構成される主力はヘンリク自らが指揮をとった。タタール人はこれらを数および力で上回る兵力を持っていた。キリスト教軍の第一部隊が戦闘の口火を切り、槍で敵を打ち負かすが、接近戦では敵の弓矢に阻まれ、戦死者が相次ぎ、ボレスラウスも戦死した。続いて第二・第三部隊が突入すると、タタール人たちは敗走を始めた。しかしタタール人の一人がポーランド語で「逃げろ、逃げろ (Byegaycze, byegaycze)！」と叫ぶと、公ミェシュコはこれを味方の敗戦と勘違いし、退却を始めてしまった。この事態を目の当たりにした公ヘンリクは「これはまずいことになった (Gorzęszą nam stalo)！」と嘆いた。しかし恐れを知らないヘンリクは生え抜きの戦士からなる第四部隊を率いて戦闘を継続し、最初の三部隊を打ち破り、バトゥ麾下 [実際にポーランドで同部隊を率いていたのはバイダールで、バトゥはハンガリーにいた] の主力第四部隊に突撃した。ポーランド軍の勝利が間近に迫り、敵が今にも逃げ出さんとしたとき、残忍な黒い顔の描かれた旗竿を持つ旗手が力に負かせてそれを地面に打ちつけると、そこから悪臭を放つ煙と霧が吹き出し、ポーランドの戦士たちは息がつまり、もはや戦うことができなくなってしまった。タタール人は彼らに襲いかかり、これを撃ち殺した。その中にはボレスラウス [二度目の死!] およびポツポも含まれていた。残りの者たちはその場から逃げ出す始末だった。

戦場に残っていたのは周囲を敵に囲まれたヘンリクと4名の騎士だけだった。彼らは敵中突破を試みるが、公の乗馬が転倒してしまい失敗した。ヘンリクは3名の騎士とともに戦い、その間に4人目の騎士 (Johannes Iwanowicz) が馬を探してきた。しかしついに脱出に失敗し、脇腹を槍で貫かれ、落馬した。タタール人はヘンリクを捕まえると戦場から連れ出し、頭部を切り離し、残った体を裸のまま置き去りにした。公ヘンリクとともにポーランドの数多くの諸侯・貴頭がこの戦いで落命した。そのなかには、最貴頭として、Sulislaus, Clemens Palatin von Glogau, Konrad Konradowicz, Stephan von

Würbenとその息子Andreas, Andreas von Pelcznicaの息子Clemens, Thomas Piotrkowicz, Petrus Kuzaがいた。ヘンリク之母聖ヘートヴィクは嫁のアンナおよびトジェブニツァ（トレーブニツ）のシトー会修道女たちとともにクロスノ・オドジャニスキ（クロッセン）に引きこもっていたが、事前に息子の戦死を予知し、修道女のアーデルハイドにこれを予言した。ヘンリク討ち死にの報が届くと、ヘートヴィクは悲しむ者たちを慰め、かくも勇敢な息子を与えてくれたことを神に感謝した。Johannes Iwanowicz はわずかの手勢とともに戦場から抜け出すことに成功し、その後8名のタタール人を討ち、9人目を捕虜とした。後に彼は自分を救ってくれた神に感謝してドミニコ会に入会した。

オポーレ公ミェシュコはレグニツァ城に逃げ帰った。すると戦死者の片耳をそぎ落としそれを9つのサックいっぱいに入れたタタール人が同城の前にやってきて、ヘンリクの頭を槍の先端に差し城の明け渡しを要求した。これが拒絶されるとタタール人は平地を荒らしながらオトムフフ（オトマヒャウ）に向かった。アンナは戦死した夫の亡骸を、右足の6本の指で見分けた。ヘンリクの遺体はヴラティスラヴィアへ運ばれ、ポッポをはじめとする戦死者の眠るフランシスコ会系聖ヤコブ修道院に安置された。ポレスラウスの遺体はルビョンシ（ロイブス）修道院に埋葬され、戦場の他の多くの戦死者の墓の上には一つの教会が建てられた。」

この伝承がいかにかに形成されたか、またどこまで修正することが可能か、それを以下で見ていきたい。

《伝説》をめぐる問題

1241年という年はまさにローマ=ドイツ皇帝フリードリヒ2世と教皇グレゴリウス9世間の熾烈な権力闘争と宣伝合戦の真っ只中であり、4月9日の事件も政治的プロパガンダの恰好の材料となった。例えば教皇はタタール人の侵攻を《墮落せる民〔その長であり、こうした事態を招来した張本人が皇帝である〕への神による懲罰》と見做し、皇帝を「アンチキリスト」として断罪した。一方、同戦闘の悲惨さも広く知れわたり、人々はワールシュタット(Walstat, Wolstat)を「屍の野 (caedis locus)」と解釈した。13世紀後半にはヘンリク2世の死は殉教(Martyrertod)とされ、1267年にその母ヘートヴィクが列聖された際には、教皇クレメンス4世の口から正式に殉教を宣告された。

14世紀以降既にシレジアの守護聖者とされていた聖ヘートヴィク（ヤドヴィガ）の伝記の俗語版の普及に伴い、ヘンリク2世もシレジアの民族的英雄 (Nationalheld) と見做されるようになった。またワールシュタット伝承の文学的脚色も16世紀初頭に確認され、《ボヘミア王ヴァーツラフによるモンゴル軍の掃討》というモチーフもここで付加される。そしてヤン・ドゥウゴシュの年代記が活版印刷に付され世に出回るようになると、ワールシュタット伝承はさらに広汎に、かつ画一的に普及していくことになる。同伝承伝播の主な担い手たる『聖ヘートヴィク伝』と『ドゥウゴシュ年代記』は、——前者はドイツ的解釈を、後者がポーランド的解釈を代弁していたのだが——、ともに相混交しつつ、16・17世紀におけるドイツ・ポー

ランド歴史叙述に取り入れられていった⁴。このルネサンス期・バロック期のワールシュタットの戦いに関する叙述の特徴としては、レオニダス、ハンニバルなどの古典古代の英雄やオットー大帝の対マジヤール戦(955年レヒフェルトの戦い)などの故事になぞらえたり、同戦闘に「キリスト教会の救済」あるいは「西欧世界の救済」といった大仰な意義付けをおこなう傾向などが挙げられる。この時期以降ワールシュタット戦を描いた絵画中に散見されるシーンに、《タタール人は戦死したキリスト教徒の片耳を削ぎ落とし、それを9つのサックに詰めた》というものがあるが⁵、これもこの時期に生まれたモチーフであった。

一方、早くは14世紀、本格的には16世紀以降、シレジア・ポーランドの貴族家門の間に、家門の始祖あるいは先祖を同戦闘に結びつけ、自家門の家格を高めようとする動きが起こってくる。例えば、その最初期の例の一つであり、本書の表紙を飾る1353年版の『聖ヘートヴィク伝』の挿絵(173頁)には、この絵の注文主ブジェク公ルドヴィクの側近を構成する家門の紋章が描き込まれている⁶。こうした現象はフランス貴族が自身の祖先をゴドフロワ・ド・ブイヨンや聖ルイの果たした偉業と結びつけようとしたり、数多のドイツ貴族が家門史中のレヒフェルト戦の記事に始祖を登場させている現象とパラレルなものである。その際何らかの史料によって同決戦への参戦が確認される場合も稀にあったが(Adelsbach, Berg, Zettritzなど)、ある家門は、兜や紋章に描かれた「タタール帽」のマーク(Heyde, Luck, Scwenckfeldなど)、あるいは「赤地に3本角の鹿」の絵柄をその証拠とし(Koslarogi, Zamoyski, Tarnowskiなど)、またある者は家門史の中で伝承を自ら捏造することで所期の目的を果たした(Rechenberg, Tader, Promnitz, Rothkirchなど)。

時代が下り、18世紀末になると、ワールシュタット戦をめぐる叙述はにわかに政治的、民族的色彩を帯び始める。18世紀中葉のフランス人の歴史家ド・ソリニャック(Pierre Joseph de Solignac, 1687-1773)は、同戦闘におけるポーランド人の貢献を著しく低く評価しているが、これは当時のポーランドの政治的弱体化と国際的地位の低下の反映であった。さらに19世紀に入ると《タタール人撃退》への功労度をめぐり、きわめてナショナリスティックな論争が展開される。チェコの歴史家フランツ・パラツキー(Franz Palacky)が1842年の論文の中で、ヘンリク2世ではなくボヘミア王ヴァーツラフとボヘミア人こそタタール人「撃退」の真の功労者である、としたのに対し、ドイツ人研究者のホルマー・グリュンハーゲン(Colmar Grünhagen)らがこれに弁駁する、といったように甲論乙駁の水掛け論に陥った。ポーランドでは19世紀末までナショナリスティックな評価は見られず、ワールシュタット戦はむしろ文学や詩の題材であって、歴史叙述の中では比較的周縁に位置づけられていた。しかし1872年にポーランド科学アカデミー(Polska Akademia Umiejętności: PAU)が設立され、批判的歴史学が根づいていくと、現実としての祖国の分裂というトラウマが歴史家の史観に影響を及ぼし、ポーランド社会の起源と祖国分裂の原因究明への欲求が歴史研究をつき動かしていくようになっていった。ワールシュタット戦をはじめとする様々な異教徒との歴史的決戦において常にポーランドが西欧キリスト教社会の〈防壁〉としての役割を果たしてきたことを主張したアントン・ホウォニェフスキ(Anton Chołoniewski)は、まさに当時のポーランド人研究者の代弁者であった。

両大戦間期の同戦闘に対する評価は現実の政治情勢を如実に反映していた。1934年1月26日に独ボ不可侵条約が締結されると、同戦闘に代表される両国民の歴史的協働、運命共同体的関係を主張する説が唱えられ（ルートヴィヒ・ペトリ Ludwig Petry 等）、逆に両国関係が悪化すると、歴史の捏造・史料の曲解によって同戦闘をドイツ民族の歴史的偉業とする説が大勢を占めるようになる。またワールシュタット戦前夜のシレジアを対ソ戦開始前夜の第三帝国に比定する研究者（ヘルマン・オバン Hermann Aubin等）も出てくるほど、歴史家たちは冷静さを失っていた。

戦後ポーランド史学には、西に移動した西部国境の歴史的正当性の立証という新たな課題が課せられた。そして再度ヘンリク2世およびその軍の民族的帰属をめぐる不毛な議論が戦わされていくことになる。しかしモンゴル禍をローマ=ドイツ帝国にとってはあくまでも周縁的な事件であったとする、1967年のドイツ人研究者ギュンター・シュテークル(Günther Stökl)の冷静な判断は、こうした感情的争論の終結を告げるものであった。

モンゴル側から見た西征の位置づけ

1241年の事件をモンゴル西征の全体的文脈の中に位置づけるために、ここで西征の開始からその中止までの過程を佐口透『モンゴル帝国と西洋』およびヴェーバーの論文をもとに概観しておこう。

1235年カラコルムでのクリルタイはヴォルガ以西への、バトゥ(抜都)を最高指揮官(総参謀はスプテイ)とする遠征軍派遣を決議した。その狙いはブルガル・キプチャク平原の完全なる征服とジュウチ・ウルス(キプチャク汗国)領の樹立にあった。したがって遠征軍はジュウチ4子を中心に構成され、そのほかにチャガタイ家、ウゲディ家、トゥルイ家の親王たちが参加した。翌1236年西征軍はカマ河畔のブルガル市を攻略、1237年にカスピ海・キプチャク草原の征服を終えると、ルーシに侵入した。北東ルーシのリャザン公国、ウラディーミル・スズダリ公国、ノヴゴロド公国、スモレンスク公国を次々と襲撃・劫略し、さらに南・南西ルーシに入り、キエフ、ガリチ・ヴォルイニ地方、ウラディーミル市、ガリチ市を襲った。

この後モンゴル軍はハンガリー方面へ向かう主力軍とポーランド方面へ向かう側面軍とに別れるが、その目的は逃走したルーシ人、キプチャク人(コマン人)の追撃と、2年間におよぶルーシ侵攻による軍の疲労を癒すための牧草地と物資調達にあった。バトゥ率いる本隊はガリチからカルパチア山脈を越えてハンガリア中部に入り、首都ペシュトを攻撃、ティサ川支流のサヨ河畔のモヒ草原において国王ベーラ4世率いるハンガリア軍を打ち破り⁷、その後ハンガリア各地を略奪して回った。一方バイダール(チャガタイの子)、カイドウ(ハイドゥ)、オルダ諸王の指揮する約3万のポーランド方面軍は1240年末酷寒についてポーランド東部に侵攻し、1241年2月にルブリン、サンドミエシュを、3月にはポワニェツ、フミエルニクを、3月22日にはクラクフを落とし、シレジアに入る。そして4月9日ワールシュタット(レグニツキエ・ポレ)平原においてヘンリク2世麾下のキリスト教軍と戦い、レグニツァ城を攻囲するが、陥落を待たずに南下し、ラチブシュを攻略、5月初にはチェコのモラヴィア地方に入り、まもなく

本隊に合流する。

その後モンゴル軍はハンガリアの略奪行を続けていくが、1242年3月にウゲディ・ハン崩御（1241年12月11日）の訃報と本土帰還命令を受けると急遽西征を中止し、1244年にカラコルムに帰還する⁸。この本土帰還についてはウゲディの死と後継者争いが唯一の理由とされてきたが、ゲッケンヤンはそのほかに、糧秣・馬糧の欠乏、人馬の疲弊⁹、ロシア分公国、コマン族の反乱等を挙げている。

1241年の軍事的視点からの考察

1241年当時のモンゴル軍とキリスト教軍の軍事力を比較するとどうということになるだろうか。一般に戦力を比較する際には、1.兵士の数 2.武器 3.命令系統 4.情報網 5.機動力 6.補給（乗馬・糧秣など） 7.地理の把握、の諸点が注目されるべきであろう。これらの点についてフォン・ドナートの研究をもとに見ていくと、まず兵士の数は4月9日当時レグニツァに集結していた者だけで約1000～2000名、多く見積もっても4000名以下（レグニツァ城の収容能力から見てこれ以上とは考えにくい）¹⁰、これに対しモンゴル軍はバトゥ軍全体では騎兵だけで15万、歩兵は30万近くいたと推測され、うちどれほどがポーランドに進軍した別働隊に割り当てられたかは不明である。モンゴル軍が後述するように10000人規模の師団（千戸軍団／万人隊）単位で作戦行動していたこと、ポーランドの他の地域にも相当数派兵されていたことに鑑みると、実際にワールシュタット平原にいた人数がいかほどのものであったのか正確なところは詳らかにしない。

さて次に武器だが、13世紀中葉の西欧騎士の武装は、防御用のものとしては、兜、鼻あて、甲冑、鎖帷子、盾、腕甲、脛あて、また攻撃用のものとしては、槍、刀剣、朝星棒（Morgensterne）、長槍、矛槍であって、基本的に接近戦を第一に考えた武装であった。一方モンゴル軍の騎兵は軽量の革製甲冑を身につけ、武器としては小型の弓矢、先端の湾曲した剣、槍、投げ縄（Lassos）をもち、一見して機動力、長距離戦重視ということがわかる。軍馬についても、西欧側が比較的大型の乗用馬（Roß）であるのに対し、モンゴル人の馬は小型で蹄鉄も打たない毛むくじゃらの頑丈なモンゴル馬であり、これも両者の戦型の違いを象徴的に表している。西欧騎士はいわゆる一騎打ち（馬上槍試合）を戦いの基本とし、一切の術作・奸計を用いることなく、「正々堂々」、騎士道に反することのないよう、正面から密集して突撃する。一方モンゴル軍は、まず離れたところから矢を射かけ、敵の混乱に乗じて突撃するという戦法を取る。そして常に勝つことを第一とし、そのためには伏兵をおいたり、敗走すると見せかけて挟撃したりとあらゆる計略を用いた。

この様な戦闘上の駆け引きを巧みにこなしていくためには、各部隊の意志の疎通と速やかな命令の伝達・遂行が必須だ。チンギス・ハンのおこなった軍制改革はこの点を主眼としたものであった。最底辺に十人隊を置き、それが百人隊、千人隊、万人隊（千戸軍団）を構成し、各隊の長には身分に関係なく抜擢された有能な人材がおかれるこのピラミッド状の軍隊組織は、ナポレオンのその先駆と言われるように、各隊が作戦遂行上の自律的単位となっている。そして戦士の規律はきわめて厳格な軍律によって守られ、これが命令の迅速な遂行をも可能にする。

ところが元来敗残兵や義勇兵の寄せ集めにすぎなかったヘンリク軍は、危機的状況の回避という点での団結ははかられていたものの、封建的社会システムの成熟あるいはそのようなミリュウの浸透よりきたる分裂傾向、同等者への従属を嫌う風潮が災いし、集团的軍事行動のイニシヤチブの帰趨が明確ではなかった。従って一端当初の作戦が破綻すると、臨機応変に次の行動へ移ることが難しいという弱点があった。

次に実際に作戦を立てる際に重要になってくる情報網について見ていこう。モンゴル軍の情報網の広さとその伝達の早さについては夙に知られるところである。彼らは進軍前に必ず先見隊を送り、進軍先の状況、例えばその住民数、軍の士気、城塞などの防護設備、支配層の人的関係（内紛の有無など）、地理的状況等について事細かに調べ上げ、その上で攻撃方法、あるいは侵攻自体の可否¹¹を決定している。では西欧の中央アジアについての情報収集はどうだったのだろうか。1235年にハンガリアのドミニコ会士ユリアンとヘラルド他2名がヴォルガ河畔のブルガル地方へ布教活動のために赴き、当地の様子についてハンガリア王ベラ4世およびアキレイア大司教に報告している。またユリアンは1237年秋、今度はモンゴル人の情報を入手するためにルーシ地方へ発ち、モンゴル人のルーシ地方およびヨーロッパ侵攻計画について報告し、この情報は教皇の耳にも届いた（！）。この宣教師派遣を西欧の中央アジアに関する情報収集活動と考えることもできるが、1235年のそれは、当時同地方に住むと言われていたハンガリア人の祖先のキリスト教改宗を目的としたものであって、このこと自体当時の西欧社会のアジア情報の乏しさと誤解を証明しているのである。

では1241年4月9日、ヘンリク2世はどのような情報をもっていたのだろうか。彼が独自に何らかの情報収集をおこなっていたという指摘はないが、彼の軍の一部を構成するクラクフやヴェルコポルスカの敗残騎士たちからモンゴル人についての情報がある程度引出していたことは想像に難くない。しかし結果から見ると、モンゴル軍有利の平原での戦闘、ヴァーツラフ率いるボヘミア軍の到着を待たずしての出塞、モンゴル軍の常套戦法であるところの偽装敗走に騙されたこと、などその情報が十分には活かされなかったことが窺われる。

機動力については、その軽装、命令系統の確立などから圧倒的にモンゴル軍の方が勝っていたことは明らかである。補給についても、きわめて長期にわたる遠征を繰り返してきたモンゴル軍の方がはるかに優れていて、バトゥ軍15万騎全てに乗換用の軍馬が用意されていたという。糧秣は原則として現地調達であり、必要時には馬や牛で引かせた糧秣車（毎時2～3kmの速さなので軍の機動性を落としてしまう）を持込んだ。一方遠征経験の少ないキリスト教軍には有効な補給方法はなく、城に貯蔵してあるものを使うしかなかったと考えられる。最後に地理の把握については、地元のヘンリク軍の方が当然詳しかったはずだが、実際戦場となったワールシュタット平原は草原の民であるモンゴル軍に明らかに有利な戦場だった。

以上の考察から、軍事的に見て、キリスト教軍の圧倒的不利は明白である。シレジアを襲った軍勢が側面掩護のための軍でなく、ハンガリアを襲った主力軍であったならば、シレジア、ひいてはドイツも、その回復に数世紀を要するほどの大打撃を受けたであろうということはまず間違いないと言えよう。

ドイツ騎士修道会の参戦の問題

1241年ワールシュタットの戦いのような、強大な異教徒との一大決戦は、戦闘終了直後からにわかに「伝説化」が始まる。15世紀プロイセンにおける同伝承への加筆は、伝説というものがそれを語る者たちの置かれた状況や内なる欲求によって刻々とその姿を変えていく、その好例となっている。

従来ワールシュタットの戦いにはドイツ騎士修道会軍が参戦したとされ、今日の歴史叙述においてもしばしばそのように書かれている。それは主史料ヤン・ドゥウゴシュの年代記中のドイツ騎士修道会総長ポッポ・フォン・オステルナ率いるドイツ騎士修道会の参戦記事に基づいている。しかしポッポの総長在任期間が1253～57年であること、従って同戦闘中に死去したとする記事は誤りである〔この点についてはどの研究者も一致している〕ということなどから、ドゥウゴシュのこの部分に関する叙述の信憑性はたいへん低い。G・ラバダはドゥウゴシュの年代記のオリジナルテキストと加筆部分の識別を試み、その結果オリジナルにはポッポの参戦の記事はないとした。そしてこの記事は、15世紀初頭にポッポの遺体がヘンリック2世の眠る聖ヴィンケンティウス教会に移葬されたが、同修道院滞在中にこれを聞き感銘を覚えたドゥウゴシュが後に加筆したもの（1459/60年以降）であろう、としている。

ではわれわれの知る当時の状況からドイツ騎士修道会の組織的参戦の蓋然性を探ってみるとどうなるだろうか。プロイセンにおけるプルス人の討伐あるいは懐柔と植民政策の遂行は1230年代初頭から着々と進んでいたが、しばしば熾烈な戦闘を余儀なくされ、必ずしもスムーズには展開していなかった。1242年にはプルス人をはじめとする現地勢力の大反攻にあい、それまでの成果が無に帰すという事態も生じている¹²。1230年代にはプルス人征討の要員をポーランドやボヘミアにリクルートに来るほどの人員不足に悩まされていた。加えて1241年の同じころにはモンゴル軍の一部がクヤーヴィ、マゾフシェといったプロイセン近郊まで迫っており、とても援軍を大々的に派遣する余裕はなかったと考えられる。この他モンゴル侵攻のパニックから正確な情報が伝わらず、ヴラティスラヴィアの状況がドイツ騎士修道会本部にまでは届いていなかったという説もある。ただしシレジアのドイツ騎士修道会領やヘンリックの宮廷等に滞在していた騎士修道会員が参戦した可能性は大いにあり、また4月9日の戦闘に参加したボレスラフの家門がここ十数年来ドイツ騎士修道会と密接な関係にあったことから、ボレスラフ麾下に何名かの在ボヘミア騎士修道会員が参戦していた可能性も指摘されている。いずれにせよ、当時の状況から見てもドイツ騎士修道会の組織的参戦の蓋然性は低く、参戦者が仮にいたとしてもそれはあくまで個別の理由によるものだったということになる。

* * *

有力な史料の欠如、モチーフとしての魅力がワールシュタット伝承の発生と伝播を促した。それは18世紀以来歴史家の叙述にも影響を与えてきている。われわれがこのような伝承を研究対象とした場合になすべきことは、伝承が語り継がれていく中で付加されていった、〈時代精神〉を反映せる面紗を一枚一枚剥がしていくことによってその核心へと肉迫することであり、また伝承を生み出した〈時代精神〉そのものを理解することである。そういった意味で今回取り上げた論文集はワールシュタットの戦いをその《伝承》と《実像》の両面から多面的に分析

し、上に述べたような一定の成果を挙げることに成功している。しかし各論を貫く基調の欠如、あるいは総合の試みが見られないことは、この種の論集にありがちなこととはいえ、遺憾である。また1次史料レヴェルでの突っ込んだ議論がなされていない点も大きな欠点であると言わざるを得ない。これらの点について、今後の個別研究の深化とそれに基づく総合の試みを願ってやまない。

《註》

- 1.書簡類は主にマシュウ・パリスの『大年代記』に収められている。Matthaei Parisiensis, *Monachi Sancti Albani, Chronica Majora*, ed.H.R.Luard(Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores. Rolls Series.57),vol.IV(1240-1247), London, 1877, reprint 1964.
- 2.年代記類については、*MGH, Scriptores*, tomus XIX, Hannover, 1866, unveränderter Nachdruck 1963に収録されている。
- 3.*Johannis Dlugossi Annales seu Cronicae incliti regni Poloniae. Liber septimus-liber octavus*, ed. J.Dąbrowski u.a.,Varsaviae 1975.
- 4.代表的歴史家として、16世紀ポーランド王の書記官マルティン・クローマー、17世紀リーグニツの法律顧問ゲオルグ・テベシウスなどの名が挙げられている。M.Weber, S.133.
- 5.ヨハン・ルートヴィヒ・アペリンの1630年の同版画にはその様子が前景に詳しく描かれている。M.Weber, S.135.
- 6.V. Schmilewski, S.173f. この一連の挿絵には、戦闘開始時、ヘンリクの戦死と昇天、ヘンリクの首を掲げたモンゴル軍によるレグニツァ城攻囲、聖ヘートヴィクの幻視、といった伝承の各場面が描かれている。シュミレフスキはその論考の中で、こうした絵画の図像学的解析を行っている。
- 7.ベーラ4世はアドリア海方面へ敗走するがこれをウゲディの皇子カダンの軍が追撃、アドリア海岸の都市スパラトまで追い詰めこれを攻囲するがそこで本土帰還命令を受け退却した。
- 8.他の一隊はオーストリアに侵攻し、ウィーン近郊のノイシュタットにまで攻め入った。
- 9.当初の計画であったさらなる西方への遠征はこうした理由からウゲディ崩御の訃報到着以前に中止されていた。Rogerius von Torre Maggioreのメモ(*Scriptores rerum Hungaricarum tempore ducum regumque stirpis Arpadianae gestarum*[SRH], S.586)を参照。
- 10.史料によっては1万~数万人としているものもあるが、その根拠は不十分である。M.Weber, S.129. このような寄せ集め軍の正確な人数を把握するのは、戦争当事者たるヘンリクを除く同時代人にとってはきわめて困難であったのではないか。
- 11.モンゴル軍は1238年3月公アレクサンドル・ネフスキーの軍事力の強大さからノヴゴロド市進撃を中止している。佐口透『モンゴル帝国と西洋』平凡社 1970年、43・44頁。
- 12.阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』未来社 1974年、122頁以下。